

**立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）**  
**大学院生研究**  
**2008年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院		現代心理学研究科	臨床心理学 専攻
<b>指導教員</b>	所属・職名		氏名	
	現代心理学部・教授		林 もも子 印	
<b>自然・人文の別</b>	自然	・ <input type="checkbox"/> 人文	<b>個人・共同の別</b>	<input type="checkbox"/> 個人 ・ 共同 名
<b>研究課題名</b>	高校生の精神的健康とアタッチメント・スタイルとの関連			
<b>研究代表者</b>	在籍研究科・専攻・学年		氏名	
	現代心理学研究科・臨床心理学専攻・ 博士課程前期課程2年		田井 京子 印	
<b>研究組織</b>	在籍研究科・専攻・学年		氏名	
	立教大学大学院 現代心理学研究科・臨床心理学専攻・ 博士課程前期課程2年		田井 京子	
<b>研究期間</b>	2008	年度		
<b>研究経費</b>	200	千円		

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は高校生を対象に、アタッチメント・スタイルと精神的健康との関連について量的、質的に調査、検討を行った。その結果、高校生のアタッチメント・スタイルは安定型が一番多いことおよび男子が女子より精神的健康度が高いことが示された。また、不安定型は「身体的症状やうつ傾向」、「過去の傷ついた経験」、「母親との不安定な関係」との関連が示された。以上のことは、高校生のアタッチメント・スタイルは約半数が安定型であり、精神的健康度が高いことを示す一方で、不安定型の人が問題を身体の不調や抑うつ気分として表出しやすく、アタッチメント・スタイルは内的対象表象の質とも関連があることを示唆するものであった。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[高校生] [アタッチメント・スタイル] [精神的健康]

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)**問題と目的**

人は生まれてからその生涯を終えるまで、多くの人に出会い、出会った人々とさまざまな関係をつむぎながら生きていく。河合(2008)が心理療法の根本は人間関係であると述べているように、心理臨床において、種々の対人関係領域に通底する、共通の基本枠として応用されるアタッチメントの視点から、個人が抱える問題や主訴の背景を理解していくことは重要なことと考える。

従来のアタッチメント研究の多くは、養育者との関係性か、親友・恋人・配偶者などの関係性かを問題にした研究であり、特に青年期のアタッチメント研究は、日本においては数少なく、高校生を対象としたアタッチメントの研究はほとんど見られない。そこで本研究では、高校生のアタッチメント・スタイルと精神的健康との関連について、アタッチメント対象との現実の対人関係と内的対象関係の表象の双方の視点から量的、質的に検討することを目的とする。

本研究は申請書に記載のように、研究Ⅰと研究Ⅱから構成される。以下に研究ごとに分けて研究成果を報告する。

**研究Ⅰ****目的**

質問紙調査によって、高校生が自身のアタッチメント・スタイルの型をどのように認識しているのかを明らかにする。さらに、アタッチメント・スタイルの型によって、精神的健康度にどのような違いがあるのかを検討することを目的とする。

**方法**

**調査対象者**：首都圏，東海地方，中部地方，中国地方の合計 6 校の高校 2，3 年生（男子 518 名，女子 532 名）

**質問紙の構成**：アタッチメント・スタイルの測定には、自己記述式のアタッチメント・スタイルを測定する質問紙である Relationship Questionnaire（以下、RQ とする。Bartholomew & Horowitz, 1991）を用いた。精神的健康度の測定には、日本版 GHQ28 精神健康調査票（中川・大坊，1985），28 項目 4 件法を用いた。GHQ28 では、調査協力高校の要請によりネガティブな項目を削除し、25 項目を採用し、ポジティブな 20 項目をダミー項目として加えた。

**結果**

調査協力者のうち、有効回答者 1,050 名（男子 518 名，女子 532 名）の GHQ 合計得点は、 $M=29.6, SD=11.55$  であった。高校生が認識している自身のアタッチメント・スタイルは、安定型 31.4%，拒絶型 17.4%，とらわれ型 28.9%，恐れ型 22.3% の比率であった。性別（男，女）とアタッチメント・スタイル（安定型，拒絶型，とらわれ型，恐れ型）を独立変数とし、精神的健康尺度（身体的症状，不安と不眠，社会的活動障害，うつ傾向）を従属変数とする被験者間 2 要因の分散分析を行った結果，男女間，アタッチメント・スタイル間に有意差が見られた。また，多重比較を実施したところ，「とらわれ型，拒絶型，恐れ型」は，「身体的症状，不安と不眠，社会的活動障害，うつ傾向」と強い関連が見られた。

## 研究成果の概要 つづき

### 考察

結果から、高校生におけるアタッチメント・スタイルは、安定型 31.4%、とらわれ型、恐れ型、拒絶型の順に多いことが示され、欧米の安定型 47%に比べて少ない比率であることから、文化差のあることが推測される。また、高校生は安定型が約 3 割で残りの約 7 割が不安定型であり、成人の安定型が 6 割弱いることを考慮すれば、高校生のアタッチメント・スタイルは移行期にあることが推測される。

一方、精神的健康度の指標である GHQ 得点の平均値は、神経症者群と大学生群の中間にあり、高校生の得点分布の形状は大学生群の得点の分布形状に類似していることから、高校生が精神的に不安定な時期にあることが示唆された。さらに男子が女子より精神的健康度が高いことが明らかになり、女子の方が身体や気分の不調に敏感であることが示唆された。一方、安定型のアタッチメント・スタイルは、他の型より精神的健康度が高く、特に「とらわれ型、恐れ型」は「身体的症状、不安と不眠、社会的活動障害、うつ傾向」と強い関連が見られたことから、不安定型の人が問題を身体の不調や抑うつ気分として表出しやすいことが示唆された。

## 研究Ⅱ

### 目的

アタッチメント・スタイルを測定する半構造化面接法である Attachment Style Interview(以下, ASI とする)を実施し, ASI の結果と, 質問紙法の Relationship Questionnaire(以下, RQ とする)の結果とがどのように関連しているのかを検討することによる RQ の妥当性の検討, および ASI を用いた面接の質的検討を目的とする。

### 方法

**面接調査対象者:** 研究Ⅰの質問紙上で面接調査への承諾を得た高校 2 年生 8 名(男子 2 名, 女子 6 名)。

**調査手続き:** Bifulco (2007) が作成した青年期用バージョンの ASI の構造化された面接文, 評定シートを用いて, 個別に ASI を 1 回行った。所要時間は約 60-100 分であった。後日, 追加質問の必要のある調査対象者に, 追加質問の承諾を得た後, 電話で追加質問を行った。所要時間は約 10-30 分であった。面接調査の実施に際し, ASI インストラクターの有資格者である林教授から ASI の訓練を受けた。

### 結果

安定型が 2 名, 不安定型が 6 名であった。ASI と RQ との対応においては, アタッチメントの「安定性」の点で 5 名が一致し, アタッチメントの「スタイル」の点で 3 名が一致した。

### 考察

アタッチメントの安定性とスタイルの観点から, RQ の妥当性が確認された。RQ において「安定型」と回答した調査協力者 3 名は, ASI において 3 名とも「引っ込み型」と評定されたことから, 「引っ込み型」は自己への信頼が高いため, 自身のアタッチメント・スタイルについて「安定型」ととらえる傾向があることが示された。また, アタッチメント対象を持たない人やアタッチメント対象との関係が不安定な人は, 精神的健康度が低いことが示唆された。